様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 24 年６月２６日現在

機関番号：32606
研究種目：若手研究 B
研究期間：2008～2010
課題番号：２０７２０１８９
研究課題名（和文）　古都・長安の“再”発見－足立喜六著『長安史蹟の研究』を中心に

研究課題名（英文）　Rediscovery of Old City "Chang An"

研究代表者　村松　弘一（Muramatsu Koichi）
学習院大学・東洋文化研究所・准教授

研究者番号：７０３６５０７１

研究成果の概要（和文）：
本研究では近代中国の古都・長安における文物保護の動きを『長安史蹟の研究』を著した足立喜六をめぐる様々な資料を通じて見ることが目的である。（１）足立の撮影した古写真と現代の遺跡の比較、（２）碑林の博物館化を通じて見た近代中国の政治権力と文化政策、（３）外国人による西安の文物の海外流出と現在の所蔵状況（米国・ペンシルバニア大学博物館、仏国・ギメ美術館）など様々な観点からの調査をおこなった。外国人が西安を訪れることによって発生した大秦景教流行中国碑流出未遂事件や唐太宗六駿流出事件などを通じて、一地方都市となっていた西安の文物に光があてられたが、複数の政治勢力が存在していた民国期においては、別々に文物保護を行っていたため、1944 年なりようやく文物保護の拠点たる博物館が完成したことが判明した。なお、本研究を通じて、足立喜六氏遺品資料の調査が可能となったため、さらなる研究の深化が期待できる。

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this research is the research about the preservation of cultural properties in the old city“Chang ’an”in modern China. I use various data about Kiroku Adachi and the person of Meiji era. Kiroku Adachi wrote "the research of the Chang’an historic relics". The following investigations were performed.(1) Comparison of the ruins of the old photograph which Kiroku Adachi took and the present photograph.(2) the research about the political power and cultural policy of modern China, through investigation about the transformation from Beilin to modern museum(3) The overseas outflow of the cultural assets of Xi’an, and the present possession situation (the University of Pennsylvania museum and Muse'e Guimet)Through foreigner visiting to xian,many people reconcerned the cultural properties of xian in modern China. But in modern China, since many governments existed, the preservation of cultural properties policy was also performed separately. Therefore, the museum for preservation of cultural properties was materialized at last in 1944. In addition, since investigation of Kiroku Adachi collection was attained through this research, the further research is expectable.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：東洋史
科研費の分科・細目：中国古代・中近世史
キーワード：中国古代、古写真データ、都市の変化、古都、長安

１．研究開始当初の背景

中国・陝西省西安市は周から秦漢、隋唐に至る中国古代史上、最も重要な都・長安であった。しかし、宋代以降、この都は歴史の中心からはずれ、清末・民国期には一地方都市となってしまった。近代という時代において古都・長安の多くの文物が欧米や日本等海外へと流出した。デンマーク人による大秦景教流行中国碑流出未遂事件は、孔子廟の碑林に景教の碑を収蔵するという結末に至った。その後、西安における博物館の開設は 1944 まで待たねばならないが、文化財保護の第一歩であったといえる。本研究では、このような近代西安における古都と古物（文物）の保護について、足立喜六という日本人教習を軸に調査研究をすることがそもそもの研究の始まりであった。足立喜六は 1906 年から 1910 年にかけて長安で過ごし、1933 年に『長安史蹟の研究』を刊行した人物である。

２．研究の目的

明治 39 年（1906 年）に中国・西安の陝西高等学堂に赴任した足立喜六氏が著した『長安史蹟の研究』掲載の写真を通して、清朝末期から民国初期における古都・西安の変化を写真資料に基づき復元し、その過程で海外の研究者等の活動によって文化財がどのような運命をたどり、その結果、中国における文化財保護の観念がどのように生まれたのか、そして、博物館が成立したのかという問題について考察することを目的とした。古都・長安における文化財の保護はその地域の郷土意識を形成する方法であるとともに、清朝末期から民国初期におけるナショナリズムの形成にも重要な政策であった可能性も考えられるため、その方面における研究もすすめることも目的とした。

３．研究の方法

本研究では３つの研究アプローチから研究をすすめた。

［アプローチ１］

西安古写真資料の収集と整理

・西安古写真のデータ収集・撮影
足立喜六『長安史蹟の研究』およびその他の明治期の日本人が撮影した陝西省と西安の写真をスキャニングしてデータベース化をはかる。さらに、現地に赴き、足立らと同じアングルから撮影をする。

・足立喜六氏関係資料の調査
日本・中国にある足立喜六に関する資料の調査をおこなう。

［アプローチ２］

碑林博物館・陝西高等学堂に関する調査

・近代西安の文物保護についての研究
近代中国の博物館開設史および文物保護に関する資料を収集し、西安における文物保護、博物館開設に関する特殊性について検討する。

・清末西安の教育と日本人教習の調査
足立喜六の西安での教学生活を理解するため、外交史料館等の日本側の資料と近代中国教育史の資料を調査、比較検討し、西安の日本人教習の特徴について検討する。

［アプローチ３］

海外流出文化財の調査

・米国ペンシルバニア大学博物館調査
西安から流出した文物を調査するため、特に唐の太宗の昭陵の六駿が収蔵されている博物館にて調査する。

・ギメ東洋博物館所蔵資料の調査
西安にある大秦景教流行中国碑のレプリカを所蔵する博物館は世界に多くあるが、そのうちの一つであるフランスの博物館を調査する。

４．研究成果

上記３つのアプローチによってそれぞれの研究成果を得た。

［アプローチ１］

西安古写真資料の収集と整理

・西安古写真のデータ収集・撮影

本研究が基礎とする足立喜六『長安史蹟の研究』に所載されている西安の古写真のほか、桑原隲蔵『考史遊記』等日本人学者による旅行記、西北芸術考察団の王子雲によって撮影されたる写真およびスケッチ、朝日新聞等データベースの古写真等およそ 500 枚をスキャンし収集・整理した。また、西安市の碑林等にて古写真と同アングルからの撮影をおこなった。

本研究が基礎とする足立喜六『長安史蹟の研究』等に掲載されている西安の古写真およ 500 枚をスキャニングし、西安にて同アングルから撮影をおこなった。

秦の始皇帝陵
［1906-1910］

秦の始皇帝陵
［2009］

・足立喜六氏関係資料の調査

足立喜六氏の長男の子である鶴田温子氏所蔵の足立喜六氏の遺品に関する調査をおこなった（2010 年２月）。鶴田氏はこの 10 年ほどの間に祖父の遺品の整理をしている。所蔵品には『長安史蹟の研究』に掲載もしくは別アングルからの焼き付け写真やガラス乾板、拓本類などがあった。また、詳細な足立氏の履歴もまとめられており、今後の本研究課題の調査に有用な情報を多く得られることができた。

西安市内足立宅前［1906］
＜鶴田温子氏所蔵＞

唐六駿（『長安史蹟の研究』未掲載）
［1906-1910］
＜鶴田温子氏所蔵＞

足立氏西安時代の書き込み入り『仏国記』［1906-1910］＜鶴田温子氏所蔵＞

［アプローチ２］

碑林博物館・陝西高等学堂に関する調査

・近代西安の文物保護についての研究

古写真に見られる文化財の近代における保護状況について検討するため、『西安碑林史』等の資料で碑林から陝西省歴史博物館開設に至る経緯について整理し、大秦景教流行中国碑流出未遂事件、古物保存法の施行、中央古物保管委員会、西京西京籌備委員会、西北芸術文物考察団、陝西省歴史博物館等の事件・機関についての史料をもとに、「西安文物保護事業年表（稿）」を作成した。

足立喜六らが西安に滞在している際に発生した景教碑流出未遂事件をきっかけに孔子廟内の碑林が西安附近の石碑を収集・保管する機関へと変貌するが、陝西省歴史博物館が開館するのは 1944 年のことであった。博物館開設に向けた中心的な機関は、1932 年から 1945 年まで西安の都市計画をおこなっていた南京国民政府直属の西京籌備委員会であると考えられる。そのことは 1938 年 3 月の張鵬一撰文「重修西安碑林記」に記された整理西安碑林工程監修委員会委員の筆頭に西京籌備委員会委員長・張継の名が見られることからも想定できる。西京籌備委員会に関する档案資料集よると、委員会は上海事変以降、西安が西京陪都として位置づけられ、西安での道路整備・遺跡保護・植林活動・学校建設・文物事業などをおこなった。西京籌備委員会の文物事業は、西北開発の推進とともに文物事業をおこなった時期（1932 年～1937 年）、抗日戦争のために低調となった時期（1937 年～1940 年）、重慶国民政府の西北芸術文物考察団と協力して文物事業を展開した時期（1941～1944 年）に区分できる。

（この調査の成果は「西安の近代と文物事業－西京籌備委員会を中心に－」『近代中国の地域像』として刊行した）

・清末西安の教育と日本人教習の調査

足立喜六が陝西高等学堂に赴任していた 1906 年－1910 年の陝西省における日本人教習の受け入れ状況・教高等学堂の教育カリキュラム・日本人教習の生活について、日本外務省記録を整理した。足立喜六が陝西高等学堂に赴任していた 1906 年－1910 年の陝西省における日本人教習の受け入れ状況・教高等学堂の教育カリキュラム・日本人教習の生活について、日本外務省記録を整理した。

（この調査に関して「清末西安の教育と日本人教習－足立喜六を事例に」と題して韓国にて報告した。）

［アプローチ３］

海外流出文化財の調査

・米国ペンシルバニア大学博物館調査

『長安史蹟の研究』に写真が掲載されている唐昭陵の墓道に配置された六駿（六頭の馬のレリーフ）のうち４枚は碑林博物館、２枚はペンシルバニア大学博物館におさめられている。近年、博物館のアーカイブズから、大学がこのレリーフを購入した際に、骨董商との間でかわされた書簡が発見、公表された。そこで、現地資料調査をおこない、1918 年～21 年にかけての骨董商 C.T.L00 と博物館長ゴードン氏の書簡を確認し、300 枚以上の資料を撮影した。

（この調査の概況については、「引き裂かれた唐昭陵「六駿」－ペンシルバニア大学アーカイブズ資料から」と題して報告した）

C.TLoo から館長のゴードン宛の書簡

六駿購入時の写真

・ギメ東洋博物館所蔵資料の調査

フランス・パリのギメ東洋美術館において、ライブラリアンの曹女史（台湾出身）の協力を得て、西安・碑林所蔵の「大秦景教流行中国碑」の複製品が 1917 年に収蔵されたこと、セガーレンらによる 20 世紀初頭の西安に関するガラス乾板資料を所蔵していることを確認した。また、20 世紀初頭のギメ美術館コレクション目録を調査し、唐・太宗昭陵の「六駿」のうち、米国フィラデルフィアのペンシルバニア博物館所蔵の二頭のレプリカを購入していたことを発見した。また、創始者のエミール＝ギメは「太宗」というオペラを制作していたこともわかった。北方遊牧民をも制圧した唐太宗は中華民国の文物政策において、近代中国のナショナリズムの象徴として、その陵墓である昭陵も保護された。近代ヨーロッパでは、太宗に対してどのような認識をもっていたのか、新たな課題として浮かび上がってきた。

本研究の３つのアプローチを通じて、1900 年初頭における足立喜六を中心とした古都・西安の文物や教育の状況、1910 年代～30 年の西安の文物の海外への流出した状況、1930 年～40 年代の西安の文物保護から博物館設置までの過程に関して、国内外の資料の収集・調査・研究をおこなうことができた。外国人が西安を訪れることによって発生した大秦景教流行中国碑流出未遂事件や唐太宗六駿流出事件などを通じて、一地方都市となっていた西安の文物に光があてられたが、複数の政治勢力が存在していた民国期においては、別々に文物保護を行っていたため、1944 年なりようやく文物保護の拠点たる博物館が完成したことが判明した。

なお、本研究を通じて、足立喜六氏遺品資料の調査が可能となった。そのため、代表者は科研費前年度申請によって基盤研究（C）「近代日本人のみた古都・長安の風景－足立喜六遺品資料を中心に」に申請し、採択された（平成 23－25 年度）。今後は本研究で得た成果を基盤として、足立喜六氏の遺品資料の整理を着実にすすめつつ、近代西安の都市史・文物保護史など波及する分野の研究をおこないたい。

なお、本研究の成果を高校生向けにわかりやすくレクチャーすることを目的に２回、日本学術振興会「ひらめき☆ときめきサイエンス」を開催した。第一回目は「中国の古都・長安へのタイムスリップ－古写真の語る歴史－」（学習院大学、2009 年 12 月）、第二回は東海大学と協力し、「宇宙と地下からのメッセージ－秦の始皇帝陵が語る古代中国」（学習院大学、2010 年８月）のテーマで開催した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

村松弘一「漢代における災害の救済（上）」
『日本秦漢史学会報』9 号、2008 年

村松弘一「秦漢環境史研究の現在」
『歴史評論』699 号、2008 年

〔学会発表〕（計９件）

村松弘一「近代日中交流史のなかの「学習院」－人・文物・書籍」香港中文大学日本研究学科講演会、香港中文大学、2012 年 3 月

村松弘一「引き裂かれた唐昭陵「六駿」－ペンシルバニア大学アーカイブズ資料から」国際シンポジウム「見せるアジア、見られるアジア－近代国家と博物館・博覧会」学習院大学、2012 年 1 月

村松弘一「明治－昭和前期、学習院の中国人留学生－学習院アーカイブズ所蔵資料から」辛亥革命 100 周年記念特別講演会「近代日中教育交流をめぐって」、学習院大学、2011 年 10 月

村松弘一「碑林から博物館へ－近代西安における文物保護事業の展開」学習院大学史学会大会、2010 年、学習院大学

村松弘一「西安の近代と文物保護－近代中国のある地域像－」慶應義塾大学東アジア地域研究センター報告会、2010 年、慶應義塾

村松弘一「清末西安の教育と日本人教習－足立喜六を事例に」中国史学会（韓国）2010 年、慶北大学校（韓国・大邱）

村松弘一「近代西安都市史と文物史の資料を求めて－足立喜六資料・ペンシルバニア大学アーカイブズ資料の調査」、陝西師範大学招待講演、2010 年、陝西師範大学

村松弘一「西安の近代と文化財保護」慶應義塾大学東アジア研究所「近代中国の地域像」研究会、2009 年、慶應義塾大学

村松弘一「西安の近代と文化財保護－西安碑林管理委員会と西京籌備委員会」慶應義塾大学東アジア研究所研究会、2008 年、慶應義塾大学

〔図書〕（計 3 件）

村松弘一等（共著）『近代中国の地域像』（山本英史編。分担執筆：「西安の近代と文物事業－西京籌備委員会を中心に－」）、山川出版、2011 年 12 月

村松弘一等（共著）『東アジア書誌学への招待・１』（大澤顯浩編。分担執筆：「書籍と文物がつなぐ日本と東アジアの近代－学習院大学コレクションから」）、東方書店、2011 年 12 月

村松弘一等（共著）『知識は東アジアの海を渡った』（大澤顯浩編）丸善プラネット、2010 年

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）　○取得状況（計０件）

〔その他〕

「ひらめき☆ときめきサイエンス」を実施

①「宇宙と地下からのメッセージ―秦の始皇帝陵が語る古代中国」（2010 年）

②「中国の古都・長安へのタイムスリップ―古写真の語る歴史―」（2009 年）

６．研究組織

(1)研究代表者

村松　弘一（Muramatsu Koichi）
学習院大学
東洋文化研究所准教授
研究者番号：70365071